

TS油圧パッケージ取扱説明書

機種 : TS-22EP5TI-2807V

1. 概要

このTS油圧パッケージは、低圧大容量、高圧小容量のポンプを備え、負荷が大きくなるとアンロード弁により高圧小容量ポンプのみ作用するコンビネーション形です。

アクチュエーターの制御には電磁切換弁が必要です。

ご使用前に、この「取扱説明書」をよくお読みいただき、正しくお使い下さい。

2. 仕様

形 式	TS-22EP5TI-2807V
定 格 圧 力	14MPa
無負荷時吐出量	24.8/30.4L/min (50/60Hz)
アンロード時吐出量	3.0/3.6L/min (50/60Hz) (5MPa)
リリーフ弁調整範囲	6.5~14MPa
アンロード弁設定範囲	3~5MPa (内蔵固定)
タンク容量	14L (上下限差 2.6L)
電 源	三相, AC200V, 50/60Hz (AC220V 60Hz)
モーター形式	全閉外扇形
モーター出力	2.2kW
定 格 電 流	50Hz 10.6/60Hz 9.4A (AC220V 60Hz 9.2A)
回 転 方 向	ファンカバー側より見て右回転
大 き さ	幅291×奥行391×高700mm
質 量	54.3kg
取 付 け 方 向	タンクを下側にして垂直取付け

3. 油圧回路図

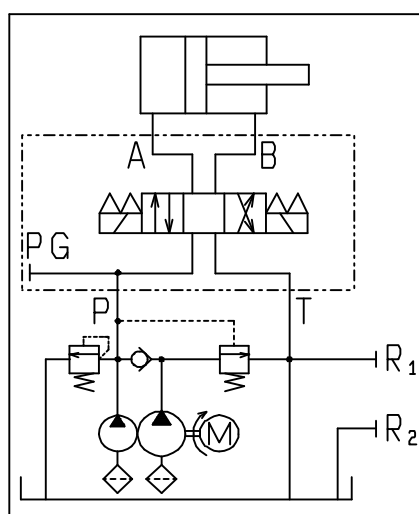


図1に示すように低圧大容量と高圧小容量の2台のポンプ、リリーフ弁、アンロード弁が内蔵されています。オプションで電磁切換弁、積層弁の取付けができます。

☆ポートサイズ

P, T, R₁, R₂ポート…… Rc 3/8

<オプション>

A, Bポート…… Rc 1/2

圧力計取り付け口…… Rc 1/4

(PGポート)

図1 油圧回路図

4. 各部名称及び外観寸法

4-1 標準品

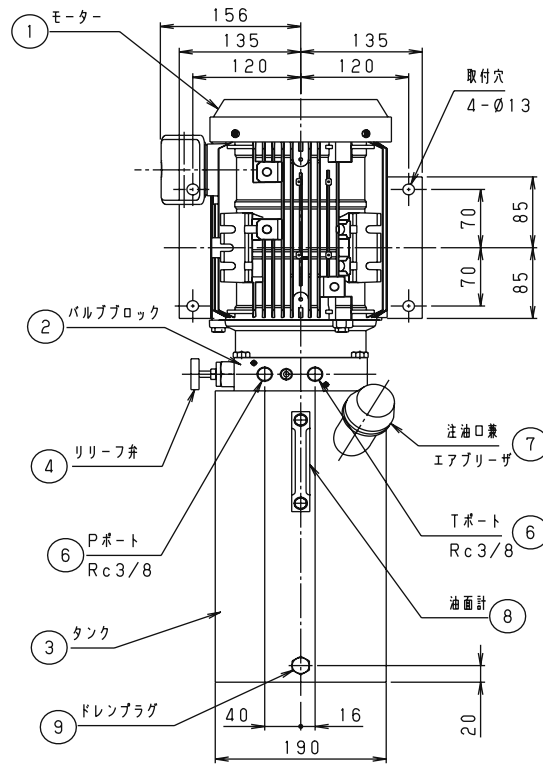


図2 正面図

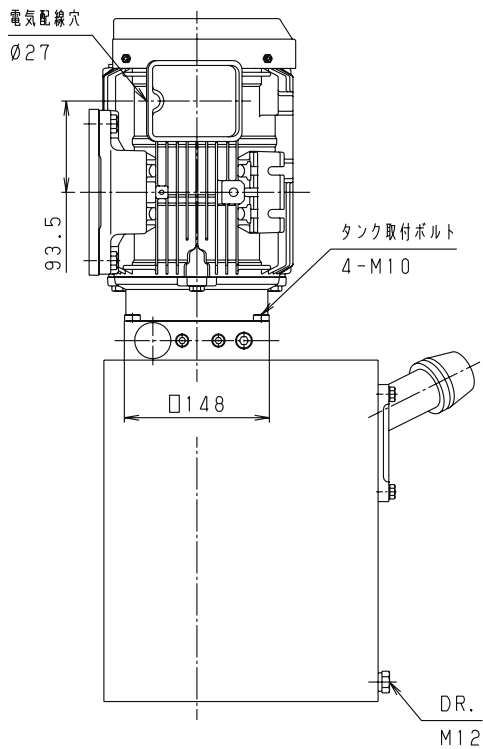


図3 左側面図

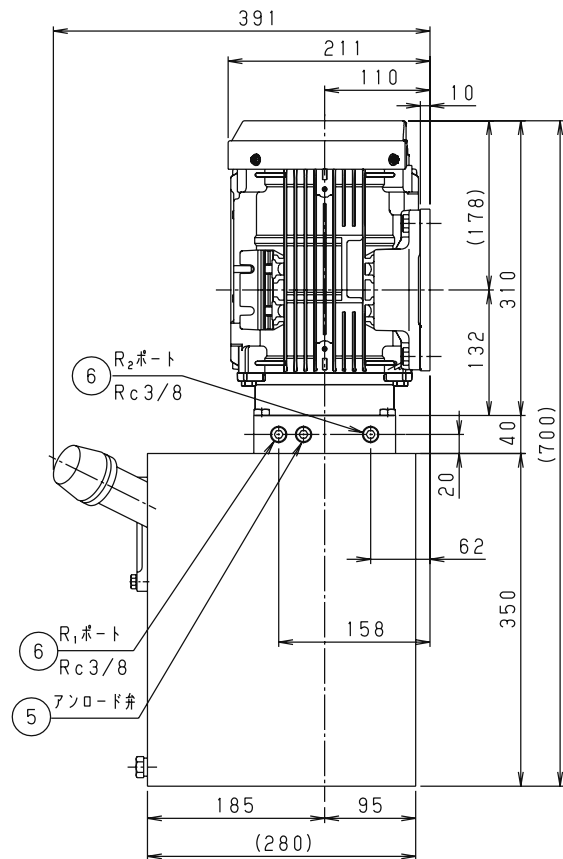


図4 右側面図

4-2 オプション品（電磁弁、積層弁付き）

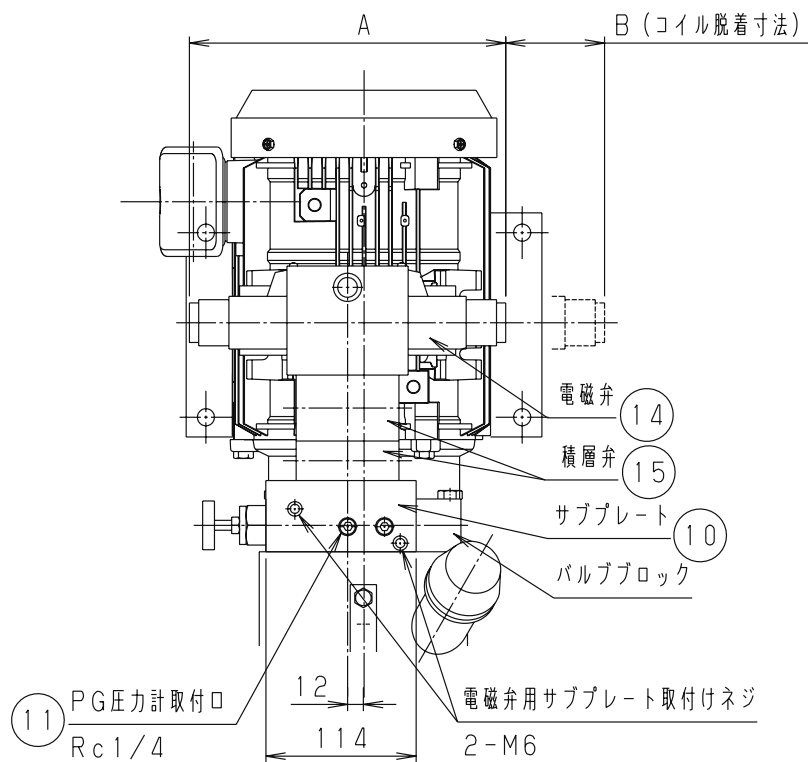


図5 正面図

電磁弁寸法

ソレノイド電圧	A	B
AC100、200V	239	47.5
DC12、24V	284	70.5

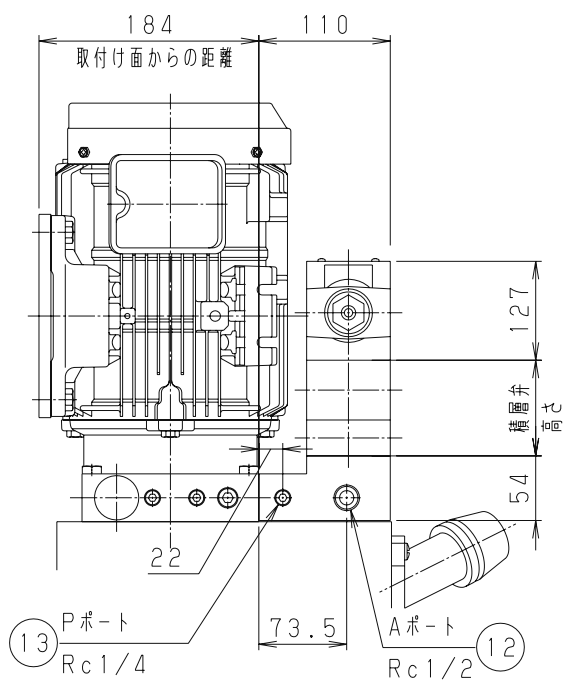


図6 左側面図

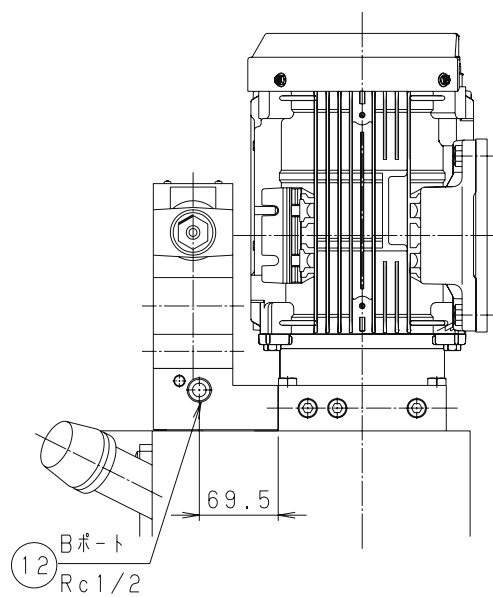


図7 右側面図

5. 各部の機能

5-1 標準品 (図2, 3, 4参照)

- ①モーター・・・・・・・・全閉外扇形連続定格の三相誘導モーターです。結線は、端子箱内端子台に確実にビス止めして下さい。
回転方向は、ファンカバー側より見て右回転が正常です。
- ②バルブブロック・・・・本機の中心的役割をはたすもので、リリーフ弁、アンロード弁が内蔵されています。R₁, R₂ポート以外の六角穴付プラグは、外さないで下さい。
- ③タンク・・・・・・・・バルブブロックに4本のボルトで取り付けられています。
最高14Lの油圧油が入ります。
- ④リリーフ弁・・・・・・・・油圧回路内の最高圧力を規制するための弁です。出荷時、定格圧力に設定してありますが、ノブを回すことにより、定められた範囲で調整が可能です。
- ⑤アンロード弁・・・・・・・・モーターの負荷を軽減するため、回路内圧力がアンロード弁設定圧力以上になると、大容量ポンプの吐出油をタンクへ戻す働きをする弁です。
- ⑥ポート・・・・・・・・P：油の吐出口です。 サイズR c 3 / 8
T：油の戻り口です。 サイズR c 3 / 8
電磁弁付きは、P、Tポートがサブプレートに隠れます。
R₁, R₂：油の戻り口です。 サイズR c 3 / 8
通常、六角穴付きプラグでシールしてあります。
クーラーを取付ける場合は、このポートに接続します。
- ⑦注油口兼・・・・・・・・注油の際、フタを90°回転させるだけで簡単に取り外しができます。
エアブリーザー 使用中は必ずフタをし異物の侵入を防止して下さい。エアブリーザーを兼用します。
- ⑧油面計・・・・・・・・タンク内の油面高さを確認すると同時に油の汚れを見るのにお役立て下さい。H、Lレベルの油量差は2.6Lです。
- ⑨ドレンプラグ・・・・・・・・M12の六角ボルトでシールワッシャーによりシールされています。
油圧油を抜き取る時に使用します。

5-2 オプション品 (図5、6、7参照)

これからの機能説明は、オプション品（電磁弁、積層弁付き）のみの機能です。

- ⑩電磁弁用サブプレート
サブプレート
電磁弁、積層弁を取り付けるプレートです。電磁弁連数に合わせてサブプレート取付ネジ（2-M8六角穴付きボルト）でバルブブロックに取付きます。
また、正面に圧力計取付け口、左側面にAポート、右側面にBポートがあります。
- ⑪圧力計取付け口
Pポートの圧力検出のためのR c 1/4のネジ穴です。
通常は、六角穴付きプラグでシールしてあります。
- ⑫A・Bポート
電磁弁用サブプレートにある、アクチュエータに接続されるサイズR c 1/2のネジ穴です。
- ⑬Pポート
油の吐出口です。サイズR c 1/4で通常は六角穴付きプラグでシールしてあります。
- ⑭電磁弁
アクチュエータ動作方向を切り換えるためのバルブです。（オプション）
- ⑮積層弁
電磁弁と電磁弁用サブプレートの上に積層できる制御弁です。
（オプション）

☆オプション品に関する注意事項

- (1) パッケージに直接取付けられる電磁弁の連数は、1連です。
2連以上必要とする場合は、市販のサブプレートを使用し電磁弁部分を別置きとして使用して下さい。
- (2) 電磁弁連数、使用する積層弁数が多い場合、それらを通過する際に生じる圧力損失により、Aポート、Bポートでの吐出量及びリリーフ圧力が低下します。
- (3) 油温が低いときは、弁を通過する際の圧力損失が大きくなり、無負荷運転時でもポンプ圧力がアンロード圧力付近となる場合があります。
この場合、騒音の増加や吐出量の減少が生じることがありますので、無負荷運転による暖気を行うか、低粘度油への変更をお勧めします。
- (4) 電磁弁連数の変更、電磁弁、積層弁の変更等で、取付けボルトを締め付ける場合、その締め付けトルクは、以下範囲にして下さい。
○サブプレート取付けネジ・・・・・・10～12 N・m
○電磁弁取付けネジ・・・・・・14～16 N・m
- (5) 電磁弁及び電磁弁取付け部に、無理な力が加わらないようにして下さい。

6. 使用方法

6-1 取付け・配管方法

- (1) 本機はタンクを下側にして垂直に取付けて下さい。
- (2) モーターは全閉外扇形になっていますが、完全に密閉されていませんので屋外に取付けるときは、本機全体をカバーで覆って下さい。
- (3) 設置場所の環境は、通気性が良く、周囲温度10～40℃が理想的です。
- (4) 電源の配線は、端子を確実にビス止めし端子箱のフタをして下さい。
結線方法は、R-U、S-V、T-Wです。
- (5) 本機にはRc 3/8のP、T、R₁、R₂ポート（図2、4参照）、オプション品（電磁弁付き）の場合、A、B、R₁、R₂ポート（図4、6、7参照）があります。ここへ接続する配管材料はRc 3/8を使用して下さい。他の部品の配管材料もRc 3/8、又は、それ以上のものを使用して下さい。
- (6) 使用する配管材は、十分にフラッシングしたものを使用して下さい。
- (7) 配管材を接続する時は、漏れ防止のためシールテープ等を使用し、ネジ込みトルクは30N・m程度にして下さい。

6-2 作動油

- (1) タンク内に作動油は入っていません。使用の前に注油口兼エアブリーザー（図2参照）のキャップを外して注油して下さい。
- (2) 作動油は清浄な石油系作動油で粘度グレードがISO VG32～68のものを使用して下さい。
使用頻度が激しく、油温が60℃以上になる時は、ISO VG68を使用して下さい。
- (3) タンク内の油量はHレベルで14L、Lレベルで11.4Lです。
- (4) 実使用时间 約1000hr毎に全油を新油と交換して下さい。

6-3 初めて始動する時の注意事項

- (1) シリンダや他の油圧機器が油圧回路図通り配管されているか、また電気配線に問題はないか確認して下さい。
- (2) モーターの回転方向が正常なことを確認して下さい。
回転方向は、ファンカバー側より見て右回転です。
- (3) 作動油が油面計のHレベルとLレベルの間にあることを確認して下さい。
- (4) ポンプが油を吸入しにくい場合がありますので、ポンプに負荷のかからない状態にして始動して下さい。
- (5) 作動油が配管やシリンダの中へ行き渡るまで、タンク内の油は減少しますので、タンク内の最大油量が油面計のHレベルに来るまで追加補給して下さい。又、シリンダの押し端、引き端で油面の高さは変わりますが、常に油面はHレベルとLレベルの容量差（有効油量）は2.6Lです。
- (6) 回路内のエアはシリンダまたは配管の上部から抜いて下さい。この部分からのエア抜きが困難な場合は、シリンダ両端で4～5秒のリリーフ弁動作を数回繰り返すことにより、ほぼエアが抜けます。

6-4 圧力計の取付方法

- (1) 回路内の圧力確認のために、圧力計を取り付けることをお勧めします。
- (2) 本機オプション品（電磁弁付き）には、Pポートの圧力を確認するためのR c 1 / 4の圧力計取付けポートがあります。（図5参照）
- (3) 圧力計取付けポートにチェック弁付きカップラーを取付け、必要時のみ圧力測定を行うようにすれば、圧力計の数量も少数で、しかも圧力計の耐用年数も延ばすことができます。

6-5 リリーフ弁設定圧力の調整

本機にはリリーフ弁が内蔵されています。(図2参照)

出荷時には定格圧力に設定してありますが、必要に応じて定められた範囲で調整することができます

- (1) 必ず圧力計で確認しながら調整を行って下さい。
- (2) 調整はナットを緩め、ノブを回して行います。右に回せば増圧、左に回せば減圧します。調整終了後は、ナットを締めて下さい。
- (3) このリリーフ弁は、トラブル防止のため、調整範囲外での設定はできませんので、無理にノブを回さないで下さい。

6-6 運転上の注意事項

- (1) モーター及びポンプ寿命、油温上昇の上から、定格圧力内で使用して下さい。
- (2) 電源には必ずブレーカーを組込んで下さい。モーターの焼損の恐れがあります。
- (3) 電源コードの上に重いものを絶対に乗せないで下さい。火災や感電の原因になります。
- (4) 静電防止及び感電防止のために、端子箱または、モーターベースにあるアース端子にアース線を接続して下さい。
- (5) アンロード弁設定圧力範囲内では、ポンプの騒音、振動、脈動が非常に大きくなりますので、無負荷運転時は、できる限り低い圧力で使用することをお勧めします。
- (6) バルブブロック(図2)及び、電磁弁用サブプレート(図5)には数ヶ所、六角穴付きプラグ(詰栓)がありますが、R1、R2ポート、圧力計取付けポート以外は、運転中又は、停止時においても絶対にゆるめないで下さい。本機の機能を損なうことがあります。
- (7) 使用条件により、かなり油温が上昇することがあります。特にリリーフ弁の長時間作動や流量制御は発熱の原因となります。できるだけ60℃以下の油温でご使用下さい。この油温を越える時は、運転条件を楽にするか補助タンクやクーラーを別に取り付けるようにして下さい。
- (8) アンロード弁の切り換え過渡状態での長時間使用は、極端な油温の上昇のほかポンプ寿命を短くしますので使用しないようにして下さい。

6-7 油温上昇計算式

下記、油温計算式を利用して、油温の概略値を求めることができます。

$$\text{油温 (}^\circ\text{C)} = \text{室温 (}^\circ\text{C)} + \Delta t \qquad \Delta t : \text{油温上昇値 (K)}$$

○プレス作業のように、一定のサイクルで運転される使用

(a) シリンダ停止時、モーターも停止する場合

$$\Delta t = 5X + 20$$

(b) シリンダ停止時、モーターを止めず電磁弁で吐出油をタンクへ戻す場合

$$\Delta t = 2X + 40$$

ここで、

$$X = \frac{\sum P_n \cdot T_n}{T_c}$$

P_n : ポンプ吐出圧力 (MPa)
 T_n : 圧力 P_n で運転される時間 (sec.)
 T_c : 1 サイクルの時間 (sec.)

○クランプ、チャッキングのように連続してリリーフ状態で運転される使用

(c) $\Delta t = 4P_r + 40$ P_r : リリーフ弁設定圧力 (MPa)

計算上の注意

※1 簡略式ですので、実測値と比べ誤差が生じます。

※2 リリーフ動作割合 $\left[\frac{\text{リリーフ動作時間}}{\text{1 サイクル時間}} \times 100 \right]$ が 80% を超える場合。

(c) の式にて計算して下さい。

7. 保守・点検

7-1 作動油の補給・交換

- (1) 長時間使用により油漏れなどのため、作動油の最低油面のLレベル以下になった時は、作動不良の原因となりますので新油を補給して下さい。
- (2) 実使用時間約1000 hr 毎に、油の劣化による特性や寿命の低下防止のために全部の油を新油と交換して下さい。油を抜く時はドレンプラグ (図2参照) を取り外して行なって下さい。

7-2 吸入フィルターの洗浄

- (1) 吸入フィルターが目詰まりすると騒音や流量不足の原因となります。定期的に洗浄して下さい。1日、8時間程度の使用で、1年に1～2回行なって下さい。
- (2) タンク内に低圧大容量ポンプ用高圧小流量ポンプ用の吸入フィルターが組み込まれています。タンク取付けボルト (図3参照) をゆるめてタンクを取り外して行なって下さい。この際、吸入フィルターをタンクに引っ掛けないようご注意ください。

7-3 作動圧力の確認

- (1) 作動圧力に異常がないか定期的に確認して下さい。(1～2ヶ月に1回)
- (2) リリーフ弁設定圧力が変化している時は、安易に設定圧力を調整しないで原因を調査して下さい。
- (3) リリーフ弁設定圧力は油温によって若干変化します。
例えば、油温30℃で1.4MPaだったものが60℃に油温上昇すると1.3.6MPa位に圧力降下することがあります。

7-4 油温の確認

- (1) 6-6-(7)項に記したように、油温は60℃が限界となりますので定期的に確認して下さい。
- (2) 簡易的にタンクに手を触れて油温を推定できます。
 - 油温60℃ 手で10秒程度しか触れていられない。
 - 油温80℃ 指1本で2～3秒程度しか触れていられない。

7-5 油漏れ・エア吸い

油漏れ、エア吸いは性能低下の原因となります。発見した時は、配管接合部を再配管するか増し締めして下さい。

8. 異常と処置

異常内容	原因	処置
モーターが回転しない	<ul style="list-style-type: none"> ● 配線不良 ● モーター焼損 	<ul style="list-style-type: none"> ● 配線し直し ● モーター交換
モーターの回転が遅い	<ul style="list-style-type: none"> ● 配線不良（二相運転） ● リレー接点溶着（二相運転） 	<ul style="list-style-type: none"> ● 配線し直し ● 接点交換
モーターは回転しているが油が吐出しない	<ul style="list-style-type: none"> ● タンク内の油量不足 ● 配管部よりエア吸入 ● フィルター目詰まり 	<ul style="list-style-type: none"> ● 作動油補給 ● 再配管 ● 吸入フィルター洗浄
規定油量が吐出しない	<ul style="list-style-type: none"> ● 油温が高過ぎる ● 圧力がリリーフ弁設定圧力に近い 	<ul style="list-style-type: none"> ● 使用頻度をゆるくする補助タンクを使用するクーラーを取付ける。 ● 使用圧力を下げる
規定圧力が発生しない	<ul style="list-style-type: none"> ● 油温が高過ぎる ● リリーフ弁調整不良 ● 配管部より油漏れ 	<ul style="list-style-type: none"> ● 使用頻度をゆるくする補助タンクを使用するクーラーを取付ける。 ● リリーフ弁再調整 ● 再配管
異常発熱	<ul style="list-style-type: none"> ● 使用圧力が高過ぎる ● 使用頻度が激しい ● アンロード弁切り換え過渡状態で長時間使用 	<ul style="list-style-type: none"> ● 定格圧力内で使用 ● 使用頻度をゆるくするクーラーを取付ける。 ● 切り換え過渡状態での長時間使用をやめる
異常騒音	<ul style="list-style-type: none"> ● 作動油の粘度が高い ● 吸入フィルター目詰まり ● アンロード弁設定範囲内で使用 	<ul style="list-style-type: none"> ● 規定粘度油に交換 ● 吸入フィルター洗浄 ● 配管材のサイズを大きくし圧力損失をおさえる。

※内部機構に起因すると思われる異常については、なるべく現状保持の状態で弊社宛に修理を要請して下さい。

※外部からの異物侵入により異常となる場合がありますので、配管の際、配管材その他から異物侵入することのないようご注意下さい。